



第7回 地域共生社会推進全国サミット in かが
ともに支え合う健康で心豊かなまちづくり

分科会 D



分科会 D

令和7年11月21日(金) 13:20▶15:00 加賀市文化会館 201・202 会議室



～こどもたちの笑顔がいきかう地域の取り組み～ こどもの居場所がある地域づくり

- | | | | |
|-----|------------|--------------|--|
| 司会 | あきた
秋田 | きよみ
喜代美 氏 | 学習院大学文学部 教授 東京大学 名誉教授 |
| 登壇者 | しまぎ
嶋崎 | まさとし
正敏 氏 | こども家庭庁 成育局成育環境課長補佐 |
| | かが
加賀 | だいすけ
大資 氏 | 認定 NPO 法人全国こども食堂支援センター
むすびえ公共政策領域ディレクター |
| | はやさか
早坂 | じゅん
淳 氏 | 公立大学法人長野大学 社会福祉学部 教授 |
| | なかむら
中村 | じゅんじ
純二 氏 | 認定 NPO 法人カタリバ
自治体連携プロジェクトマネージャー |



▼秋田：皆様こんにちは。ただいまご紹介いただきました学習院大学の秋田でございます。本日のテーマ、「こどもたちの笑顔がいきかう地域の取り組み～こどもの居場所がある地域づくり」を開催させていただきます。

こどもたちの数が減り、またコロナ後、こどもたち同士の関係が薄くなったと言われるようになってございます。そして悲しいことではございますが、不登校の数が35万人を超え、また、こどもたちの自殺者の数も増えているところです。子どもは何ができるのか。今日のカギは、こどもの居場所って一体何なんだろうか。そしてそれを、各地域が地域づくりとして居場所を作る。それは誰がどのようにしてできるんだろうかということで、この分科会を進めさせていただきたいと思います。まさに、実際に取り組んでおられる4人の方々が、それぞれの立場からお話をくださいます。私をご紹介するというよりも、まずは自己紹介をしていただいて、それからそれぞれのお取り組みのお話を伺いたいと思います。

それでは最初にこども家庭庁の、嶋崎様の方からお願いをいたします。

▼嶋崎：こども家庭庁から参りました成育局成育環境課の嶋崎と申します。皆さん冊子を開いていただきますと、実は今日、成育環境課長の安里が来る予定でございました。私になってしまって本当に申し訳ございません。今日、皆さまと安里の方、交流させていただくことを本当に楽しみにしてたんですが、急な公務が昨日入ってしまいまして急遽、代打で私が来させていただいております。ただ、私も日頃は、この成育環境課で居場所係という係を担当しております。まず今日はそういう係があるということを皆

さんに知っていただくことが大きいかなと思っておりますので、そこにかけたらこの顔に繋がると思っていたいただいて、今日は顔の見える関係になると私は思っております。今日皆さんからいただいた熱量とメッセージは、安里にも伝えるつもりでございますので、よろしくお願いいたします。

▼秋田：嶋崎様ありがとうございます。それでは続きまして、加賀様お願いします。

▼加賀：改めましてよろしくお願いいたします。むすびえという団体で、今居場所づくりを自治体向けに支援している事業を担当しています加賀と申します。実は私は昨年3月まで、こども家庭庁の職員でいました。前々職は、実は次の次の中村さんが働いているカタリバという団体で働いていました。なので、実はこの今の立場は別なんですけど、前職と前々職の団体の職員でもあったということで、民間の居場所づくりの話と、そして少し政策のお話を混ぜながら、居場所づくりの話をさせていただければと思います。本日は、よろしくお願いいたします。

▼秋田：加賀様ありがとうございます。それでは続きまして、早坂様お願いをいたします。

▼早坂：皆さんこんにちは。私は長野県上田市から参りました。公立大学法人長野大学に勤めております早坂と申します。私は普段、学校教育と社会教育を融合しながら、地域の力を学校に集結させて、こどもたちの笑顔を大人たち総出で作っていくにはどうしたらいいか、それを理論的・実践的に考えている人間でございます。今日は、皆さんとこうやって一緒にさせていただき、まさに皆さんの熱量をいただきにこちらに伺いました。私も精一杯務めさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

▼秋田：早坂様ありがとうございます。それでは続きまして、中村様お願いします。

▼中村：認定NPO法人カタリバから来ました中村純二です。私は、今、加賀にいて、加賀市の教育委員会と一緒に不登校政策を伴走して実装しております。2年ほどなので、まだ加賀市のことはそこまで詳しくないのかもしれませんが、加賀市の実情を紹介しながら、皆さんと一緒にこの加賀で何ができるのかというのを考えていけたらなと思っております。よろしくお願いいたします。

▼秋田：中村様、ありがとうございます。こういうメンバーで3時までお付き合いください。

それではまず最初に、国の動向として、居場所のことがどのようになっているかということ、嶋崎様からお願いをいたします。



▼嶋崎：それではよろしくお願ひいたします。まずは冒頭、地域でつくるこどもの居場所づくりということで、国の目指すビジョンを皆さんにお示しできるといいかなと思ってお話させていただきます。

今日は、「こどもまんなか」という言葉、最近皆さんよく聞かれますかね。「こどもまんなか」というそのメッセージというものを皆さんにお伝えしたいなと思っております。

まずこのスライドなんです、こども家庭庁のホームページの方にも出ささせていただいております。こども・若者の皆さんに向けたメッセージになっておりますが、この「こどもまんなか」ということで、一人ひとりの意見を聞いて、その声をまんなか置き、アクションをしていく。最も良いことは何かを考えて政策に反映していく。皆さんや子育てしている人たちの困ってる事に向き合い、いざというときに守るための仕組みを作っていきますよ、というメッセージが込められております。

この理念なんですけれども、「こども基本法」というものがございます。すべてのこどもが自立した個人として、健やかに成長できるようにということで、資料3ページまんなかのところになるんですが1番～6番ということで、差別を受けないこととか、福祉の権利が等しく保障されること、また3番の意見ですね、意見を表明する機会を設けるとか、4番の最善の利益が優先されるということが書いてあり

ありますので、この「こども基本法」のポイントを押さえていただくとありがたいと思っております。

「こども大綱」です。こども基本法は令和5年4月に施行しているんですけども、令和5年12月にこども基本法に基づいて、今後、5年程度の施策の方向性を示したものが、この「こども大綱」というものになります。ここの大きいポイントなんです、このライフステージという言葉なんです。このライフステージごとの重点項目として、政策を考えていきたいということで、幼児期と学童とか思春期では、やっぱり育むものが違うということになりますので、例えば、幼児期であれば、well-beingの基礎を築く時期ということが、記されています。学童期・思春期には、自己肯定感または社会性を育む、という時期になりますので、そのライフステージというものを意識した施策を、組んでいきたいというふうに思っております。また、別の視点として、切れ目というものをなくしていくということも大事であるということは、ポイントとして押さえていきたいと思っております。

本日皆様には、この大綱の元に作られている国の二つのビジョンというものを、ご理解いただいておりますので、ビジョンのご紹介をさせていただきます。

まず、「はじめの100か月の育ちビジョン」というビジョンでございます。皆さん、今日はピンク色の冊子をお配りさせていただいてるかなと思っております。実はこれ秋田先生にもいろいろお話をいただきながら、こども家庭庁で今進めているビジョンのひとつでございます。この「はじめの100か月」というのは小学校1年生ぐらいまでの年齢のことを言うんですけども、この期間の中で将来にわたって幸せの基礎をつくっていく時期ということに重きをおいているものになります。

冊子をめくっていただきますと、このビジョンの大切にしたいポイントが記されているんですが、1、2、3、4、5と5つあります。

1番目、こどもの尊厳ですね。こどもの権利と尊厳を守るとあります。この権利を守るところと、この2番目。ここが大事なポイントかなと思っております。こどもにとっては、まず安心できる環境があって、その環境の中であればこそ、やってみ

たいという気持ちが生まれてくる。やってみて失敗するということはもちろんあると思うんですが、失敗するとしたときに、じゃあ次これやってみようか、こうやってみようか、みたいなことを、誰かと共有しながら次のチャレンジに進んでいく、この過程が非常に大事なんじゃないかということです。

4番目の方はwell-beingと書いてある。これは保護者の方にとっても大事な時期で、正直この100か月は、親御さんにとっては大変な時期。人の手を借りたい時期だと思うんですね。こういう時期を、誰かの手を借りて、成功体験、良かったって思える経験をするのは、非常に大きいとっておりますので、このときにどういう方と接することができるか、というようなことが、ポイントになるかなと思っております。

5番目は、様々な地域の方との関係性の中で、厚みを持った地域づくりをしていくということが大事ではないか、というポイントを示しているものになります。

皆様にお渡しした冊子の他にも、解説書ということでハンドブックや動画等も作っております。また黄色い冊子等もホームページで見ただけでするので、どうか子ども家庭庁の「はじめの100か月」と検索していただきますと、様々なものがご用意されております。是非、地域に帰って、皆様にご紹介いただければいいかなと思っております。特に、この黄色い冊子になりますけれども、今、10代だからできることであるとか、あと、お互いさまとか、自分時間をどう使っていくとか、地域で共育ちとか、そういうことのポイントをまとめているものになりますので、是非ともご覧いただきたいなと思います。

そして、「はじめの100か月の育ちビジョン」の地域コーディネーターという養成事業もありますので、今地域の中でこのコーディネーターとして、親御さんと地域の方の接点を作ったりとか、そういう仕掛けをどんどんやっていくみたいなことの事例も取りまとめているので、ご参考いただけるとういかなと思っております。

続きましてもうひとつのビジョン、「子どもの居場所づくりに関する指針」というものを示しているのでご紹介させていただきます。

皆さんこういう図って見たことあるかな。これは

子どもたちにとって居場所はどのような居場所と感じますかとか、皆様にとっていくつぐらい居場所だと思えるところがありますかななどを記した図になっております。

ちなみに皆さん、居場所と聞いて自分にはこういう居場所があるよ、っていうのが何個ぐらい思い浮かべますか。一回イメージしてみて、自分の部屋とか、車の中とか、お風呂の中とか、喫茶店の角このスペースとか、大人の皆さん誰にとっても、その居場所って、それぞれあるかなと思うんですけど、こういう居場所がたくさんあればあるほど、その人にとって自己肯定感とか挑戦したいという気持ちが高まりますよ、というのを表した図になっております。この子は家に居場所があるから、学校に居場所があればいいんじゃないか、っていうものではなくて、また、居場所の数が多ければ多いほど、その地域で暮らしたいなとか、ここで自分も頑張りたいな、っていうものが育まれていくということを表した図になっております。

様々な、居場所づくりが必要になってきた背景というものがございます。地域のコミュニティが希薄になっていることとか、様々な家庭環境のお子様が増える、また、虐待が増えるというものが背景にございます。あと、外国籍のお様がいらっしゃったりとか、価値観の多様化もあって、この居場所づくりというものが進められてきている現状がございます。

私も実は田舎の人間なんです。今年の区の総会みたいなありますよね。それに参加したんですよ。区の総会に参加すると、もうそろそろ運動会とか、秋祭りとか、なんかどんどん縮小したい、回数を減らしたいみたいになるんですね、今、コロナを経てるんですけど。子どもの頃にそういうところに出て行って、自分の親がどういう地域の中で生活してるのか、人とつながっているのかとかを見れる機会って、すごく僕の中で大きくて、ここで僕も過ごしていけば、こうなるんだなあって、イメージがすごく沸いて、結果、今、自分は家に帰って、家を継いでっていうことになっているんですけど、やっぱりそういう機会ですよ。今あるものが、だんだん失われてきているということが、現状にあるのかなと思います。

こどもの居場所づくりに関する指針ということで、概要としてまとめたものになりますが、ホームページでも掲載していますので、ご覧いただけるといいかなと思っています。

先ほども申したような「こどもまんなか」というフレーズですが、そういった中で、こどもの居場所づくりを進めていっております。

ポイントをご説明しますと、まずはこども・若者が決めるものであるということになります。人から言われて、ここはお前の居場所なんやって言われても、その子が居たいと思わなかったらそれは居場所にならない、ですよね。やっぱりそういう意味で、自分自身が決めるもの、こども自身が決めるものということがポイントになっております。

ここが一番大きいポイントになっております。居場所づくりは、このギャップ、こどもと大人のギャップが生じるということになります。こどもたちにとって、何か場所を作ってあげたいなあ、公民館がどっか開放して場所を作る。でもこどもたちが来ない。ということは、こどもたちにとっては、そこは居場所になってないということになると思ってます。そういった意味で、この居場所づくりというところは、まず、こどもたちがどういう動線を歩んでるのかな、学校の帰りどこを歩いてるのかなとか、交通構成は駅から降りてどこ行ってんだろうとか、そういうこどもとの生活、動きと向き合う中で、居場所にこどもが求めていること、そして声を聞いていくことで、何かその設定が見つかっていくという、そのギャップを埋める作業が居場所作りになっていくと考えております。

こどもたちが行きたい、居たい、やってみたいと思える、そういう環境を作っていくことが居場所づくりになっております。なかなかこどもたちが「ここに居たい」という言葉って、出ないです。「やってみたい」なかなか出ないです。そういうものを引き出せる場を作っていきたい。地域の中にこの居場所づくりを進めるサイクルを、増やす、つなぐ、磨く、振り返る、というふうイメージをしております。

また、今から居場所づくりを手がけていこう、取り組んでいこうという中で、まず増やしていこう。皆さん、その前にまずどこが居場所なんだろうっていう、ニーズを把握するところから入ってると思

いますが、そういう増やすところをまずしていただいて、そこをつなげていくってことを、今やっていく地域が多いんじゃないかなと思っています。

こどもの居場所づくりで、皆さんの地元では、どういところが居場所になってるかな。児童館であるとか、こども会さんであるとか、様々あるのかなと思うんですけど。本当にここに挙げたものだけじゃなくて、先ほども言いましたが、例えば自販機のあるスーパーの角っこの待合所みたいなところあるじゃないですか。ああいうところなんかたまり場になってるのかな。こどもにとって、意外にそこが居場所になってるみたいなのところもあったりすると思いますので、こういう地域の中で、皆さんの身近なところで、どういところがこどもの居場所になってるのかなっていろいろ考えてみてもらえるといいのかなって思いますので、ひとつのこの図は参考になると思います。

居場所づくりなんですけど、先ほど申しました、こどもの声を聞くとか、こどもの権利を守るということもありますが、官民の連携が大事になってきております。今日は、まずひとつのきっかけになるんじゃないかなと思っています。実際の職員の方とか、あとは地域の方、または一般企業の方もいらっしゃる、またはボランティア、担当地域の活動をされてる方もいらっしゃると思いますので、そういった方のご協力なくしては、できていかないものになっている、と思っておりますので、是非ともまた、今日をひとつの契機として、連携というものの関係が作れていけばいいかなと思っています。

こども家庭庁としては、こどもの居場所づくりに関して、先ほどつなぐというポイントがありましたが、コーディネーターというものも事業として設けております。この居場所づくりコーディネーターというものを置いていただいて、ニーズを把握するであるとか、あとこどもの居場所同士をつなぐ、または支援するみたいなことをやっていただけるといいかなと思っていますので、是非ともこういうものを参考に取り上げていただけるといいかなと思っています。

我々が目指したいポイントになります。「こどもまんなか」という表現をしておりますが、その「こどもまんなか」を考えることで、いろんな地域の課題も見つかってくるから、そこでいろんな大人が関わること、こどもたちから、例えば、今度のこのイベントいつあるとか、今度いつこれやるとか、言われたらすごく大人ってうれしいと思うんですね。こどもとなんか通じたみたいなの、喜んでくれた。そういうことを重ねていくことが結果、こどもだけじゃなくて、皆さんも一緒になって大人が笑顔になれる空間になる、地域になるんじゃないかと考えているのは、我々目指したいところになります。

最後に宣伝だけさせていただきます。こども家庭庁の方では、皆さんに「こどもまんなか」に賛同いただいた方、またはそういうアクションですね、例えばトイレを譲ったりとか、例えばベビーカーをちょっと押してあげたとか、助けてあげたとか、そういうことを行動した場合に、「#こどもまんなかやってみた。」ということで SNS で発信していただくと、その方々に、こどもまんなかサポーターということで、こども家庭庁としてもその情報を取り上げさせていただくことができるようになっております。また、こどもまんなかアクションというマークも、登録していただくと使っていただくことが出来ることとなりますので、是非とも皆さんの行動を発信することで、機運醸成を図っていきたく思っております。

このようなホームページになっておりますので、是非とも皆さん、どんどん発信していただきたいと思っております。また、こども家庭庁では、note で、いろんな政策も取り上げさせていただいておりますので、ご参考に見ていただきますとありがたいなと思っております。

本当に、先ほど申しました皆さんと、今日も地域に顔の見える関係で、双方向でいろんな情報をいただきつつ、この政策を進めていければいいかなって思っております。

今日は、「こどもまんなか」がテーマになっております。こどもの声を聞きながら、こどもの最善の利益を考えていこう。そして、こどもの周りの大人たちが手をつないでいこうということで、決して、「こどもまんなか」にあって、大人は端っこでっていう意味ではないです、そこだけご理解いただいて、こどもはその友作りのパートナーだということで、メッセージを皆さんと共有できればいいかなと思っております。

以上です。ありがとうございます。

▼秋田：嶋崎様、ありがとうございます。居場所はこどもや若者が決めるものだ、大人の考えとこどものギャップをいかに埋めていくのか。そしてお一人お一人がまさにこどもまんなかのサポーターにという熱いメッセージを送っていただきました。

私は、実はこの絵とか、動画とか、全部作る座長をさせていただいてて思い入れがとってもあるんです。最初これは、お母さんがこども抱いてるだけだったので、お父さん書いてくださいとか、それからこども1人じゃなくて、もうちょっと書きませんかとか、周りに囲んでいる人も高齢者は書かれてたんですけど、こどももいろんな年齢のこどもに変えて欲しいんですねって言ったんですけど、今振り返って見てみると、もうちょっと若者も書いてもらえばよかったかなと、思ったりもしているところがあります。どうもありがとうございます。

それでは続きまして、こども家庭庁にもご勤務されたこともある、加賀さんからお話をいただきたいと思っております。よろしく申し上げます。





▼加賀：改めましてよろしくお願いたします。加賀と申します。

私は、今むすびえという団体に活動していることを先ほどお話ししました。むすびえという団体は、メインは全国でこども食堂を増やす、支援するという団体です。ちなみにこども食堂を聞いたことあるという方、どれぐらいいらっしゃいますか？この会場。わお！すごい！ちなみにこども食堂の認知率どれぐらいかわかりますか？

70%台（挙手）、80%台（挙手）、90%台（挙手）、92%です。

これハローキティと同率です。ポケモンは86%なので、ポケモンに勝ってます。ハローキティと同着で、96%にくまモンがいます。くまモン以下なので、ポケモン以上くまモン以下ぐらいが、今のこども食堂の現在地です。

ちなみに、そんなこども食堂を皆さん知っているということだったんで、行ったことあるという方は、どれぐらいいらっしゃいますか？（挙手）

すごいやっぱりこの会場には沢山おられますね。全国でこども食堂に行ったことがあるってのは6%です。なので、まだまだ知ってるけど行ったことがないというようなこと、これも現在地かなと思ってます。

こんなこども食堂なんですけれども、私どもですね、今、こども食堂をいろんな形でご支援させていただいてるんですが、どうしても「こども」という名前がついてるので、こどもだけが行くものという誤解がまず1つあります。もうひとつはご飯が食べられない子がいるんでしょ、というような誤解もあります。それを誤解だと言ってるのは、我々

が勝手に言ってるわけではなくて実態として、どなたでもどうぞとなっている。つまり昨年度こども食堂、今、1万800ヶ所あります。そのうちの70%はどなたでもどうぞというような形で、制限を設けてない。つまり年齢制限がないような形です。なので7,000以上ぐらい。大体、こどもだけじゃなくて、高齢者や子育ての方、若者もちろん行けます。みんな行けるような場所になってます。このこども食堂のいわゆる対象制限があるのは大体15%ぐらいです。いわゆる困窮世帯のこどもだけ、ご飯が食べられない子だけというような形で対象を絞ったり、こどもだけっていうふうに言っているのは、全体からすると、わずかであると、いうところが、私が今、誤解だというふうに言ったのはそういった実態として、見えているのでお伝えしているところです。

私が今日お話をさせていただきたいと思ってるのは、こども食堂も含めたこどもの居場所づくりが、それぞれの地域のそれぞれのやり方で、どうやったら広がっていくのかということのをですね、いろんな形で自治体の方々と協働してます。その事例と、また私は現場で直接こどもたちに居場所づくりを実践していた立場ですので、先ほどのこども家庭庁さんのお話を受けながら、ちょっと具体事例で、お話を、居場所づくりの解像度を、少しでも上がるようにご説明をさせていただければな、というふうに思っております。改めましてよろしくお願いたします。

私ですね、大事なことを言うの忘れてたと思って、先ほどの自己紹介を後悔してるんですけど、実は、加賀市に、今来ている“加賀”です。これ大事なんですよ。言おうと思っていたのと思って、実は、自分の家系図をたどったら、石川県の加賀地方からということが、なんか1890年ぐらいの、加賀喜左衛門の分家だっということがわかったんですけど、なので私のルーツはここにあるということ、今日ここにいてということが非常に嬉しいな、というふうに思う。すみません余談でどうしても言いたかったんでここで挟みました。

私、こども家庭庁の前のところで、直接こどもたちの居場所づくりをしていた、というお話をしました。これは東京都の足立区という場所で、困窮世帯の中高生の居場所づくりをやりました。月曜日が休館日なので、火曜日から日曜日まで毎日ですね、

3時から夜の9時までオープンしている場所です。登録の人数が大体300人ぐらいいて、1日50人から60人ぐらいが毎日来るような場所をずっと、2拠点運営してました。

そこで今日はですね、資料には掲載していないんですけども、そしてちょっと字が小さいので、私読ませていただきます。この施設から卒業した子が、その卒業のタイミングでくれた一通の手紙が、この居場所をよく表してくれてるなというふうに思って、少しお話をさせていただきます。

ここに書いてあることがですね、「中学1年生の7月、私は足立ベースに行きました。」これ足立ベースというのは拠点施設の名前です。「正直初めは、足立ベースは嫌いでした。行く意味ある、って思ってた。」そこまで言うんだっていうぐらい、すごいけちんけちんに言ってるんですけど、「けど、そんなそっけない自分にも、スタッフさんはいつも最高の優しさで接してくれました。自分は生まれてからあまり愛されていると感じたことがありませんでした。愛されていない訳じゃないんだけど、愛されてるとは思いませんでした。自分にとってスタッフさんがくれる優しさは、私の心の穴を埋めてくれました。スタッフさんの優しさは、私に人に対する向き合い方を教えてくれました」そんな話の中で、「今の自分があるのは足立ベースのおかげです」ということで、「どんな私でも受け入れてくれる場所がこの足立ベースだ」というようなことを書いてくれています。

これはとてもですね、ずっとここに関わった身からすると、じーんと来る手紙なんですけど、今日は、それをお伝えしたいということよりも、まさにこれが居場所と居場所づくりの難しさを表していると思います。私は居場所づくりを実践者としてやってきました。その時に、運営しているのは、この子だけじゃなくて、ここを利用する300人の子どもたちがこの場を居場所だというふうに感じて欲しいなあ、と思って願いを込めて、毎日運営するんですね。つまり居場所づくりをする人は、その目の前の人に、ここが居場所になって欲しいなと思って願いを、思いを持って活動する、そんな活動だと思います。ただ、残念ながらですね、目の前の子どもは、さっきの手紙でも「行く意味ある、嫌いだ」っていうふうに言うんです。つまり、その子にとっては、その当時は

居場所じゃなかったということです。ただ、少しずついろんな形で関わっていたところが、どこのタイミングか正直わからないんです。ただ、彼女が6年間通ってきたっていうこと。であったり、あの手紙に書いてあった「ここは私の居場所でした」というふうに言っていることから、本人にとってやっぱり居場所だということがわかった話です。

つまり、居場所づくりをしている人は一生懸命その人の居場所になることを願って活動するんですけど、本人には居場所だというふうにならないときもあるかもしれないし、ずっとならないかもしれない。ただ、何かの拍子でここは私の居場所だなあと思ってくれると、多分このギャップが埋まってくるんじゃないかなと。つまり、そこに居場所づくりの一番の醍醐味があり、難しさがあるというふうには私は思っています。

先ほども子ども家庭庁さんの方から、居場所づくりの背景みたいなお話いただいていると思うんですけど、私からですね2つキーワードで、居場所づくりって何で必要なんだろうっていうことをまとめてみました。

ひとつ目のキーワードは「どこかに」というキーワードです。これはもう言わずもがなで、もう不登校の数がとどまることなく、増え続けています。そして、残念ながら、生まれる子どもの数は減っているにもかかわらず、自ら死を選ぶ子どもたちの数は、増え続けてます。こんなアンバランスな状況は、先進国でも日本だけです。なので、こうした状況を踏まえて考えていくと、非常に子どもたちを取り巻く環境は困難だというふうに思っています。やはり地域にどこにも居場所がない、この社会にどこにも自分の居場所がないなと思ったときに、残念ながら最終的にとる判断が、自殺するというようなことなのかもしれないな、と強く思っています。そうすると、やはりこの社会のどこかに、やっぱり居場所があったらいい。その子のためにどこかに居場所づくりをしなきゃならないっていうことは、居場所づくりの強力な必要性を訴求できる背景だと思っています。

そんな話をすると、あ！じゃあ、ない子のために居場所づくりをすればいいんだっていう話になりやすいんですね。確かにそうなんですけど、「居場所がある子にはいらなないんだよね」「家が居場所って

言ってたから、別にあの子はいいでしょ」「学校が居場所なんだからいいでしょ」っていうことが、そうではないなというふうに思っている。

もうひとつのキーワード「あちこちに」というキーワードです。先ほど嶋崎さんのお話にもあった通り、居場所の数があればある分だけ、こどもたちの自己肯定感も、幸福度も、高まっているというようなデータです。もうひとつ民間のデータで、これは大人にもとったアンケートです。このデータでは、「居場所が自宅」というふうに答えている人よりも、「自宅と違うところにある」というふうに答えている大人の方も含めた全体が、幸福度が高いということです。つまり家だけじゃなくって、他のところにも居場所だというふうに思っている大人の方もまさにですね、幸福度が高いと。多分これは皆さんの身近でも心当たりがあるんじゃないかなと思います。

なぜなら、私も子育てをしている身なんですけど、私の本当に恥ずかしい話で、子育てをすると、どうしても、妻とのケンカが増えたなあというふうに、ちょっと思うところがあるんですね。ただ、私には、極楽湯という居場所があるんですね。スーパー銭湯なんです。ここはサウナが大好きで、ここに一時的に逃げ込むと、また戻ってきやすくなるというか、向き合いやすくなるっていうことが、自分でもわかってるんで、無理にそういうときは家にいないで、もう思い切って、夜、こどもを寝かしつけ終わったら、極楽湯行こうみたいなことをずっと思ってるんです。っていうように、家は常に自分の居場所なんですけど、極楽湯もあることで、自分の何か家という居場所を、うまく居場所であり続けるようなことの工夫ができてると。でも居場所がここしかないって思うと、そこにしがみついたらいいので、そこが何か変な感じになってる、でもどうしたらいいんだろうというふうに、変にじたばたすると、逆にしんどくなることもあると思うので、やっぱり居場所というものには複数ある方が、飛び石のように、健やかでいられるっていうことなんじゃないかなというふうに思ってます。

かつですね、こども家庭庁のデータでも、居場所の中でも地域に居場所があると、いろんな幸福度が高まるぞ、っていうことがわかってます。家よりも、地域にある方が、インターネットになると逆に、幸

福度が下がってしまうっていうことが出てくるデータなんですけど、もちろんインターネットよりも、やっぱり地域に居場所がある方が、こどもたちは健やかでいられてる、っていうデータでも裏付けされてます。

こうしたことから、やっぱり地域のあちこちに居場所があるっていうことは、とっても大事なんだろうなと思ってます。ですので、「どこかに」ということもそうなんですけど、居場所がある子も、他にもあったほうがいいよねと、地域の中にいろんなところに居場所があったほうがいいということが、私が居場所づくりを進めていく中で、必要だというふうに思っている二つ目の背景です。

ひとつですね、この居場所づくりにおいて、こども食堂とかをひとつ例に出すとですね、こども食堂の風景は、先ほど、どなたでもどうぞというような食堂のあり方なので、こどもがもちろん来てるんですけど、一方で、目線をそらすと、高齢者が楽しくそこで食事している風景もあります。大体こども食堂からなかなか帰らない、と言われる子育て世帯のお母さんだったりするんですけど、なぜなら、もしかしたら、家の愚痴を話してるかもしれないし、子育ての悩みをシェアしてたりする。そこで仲良くなった人と、なかなか帰らずに、「お母さん帰ろうよ」と言ってるけど、お母さんが帰らない、みたいなことが結構現場で起きるそうなんです。っていうことを考えると、こども食堂はこどもの居場所、もちろんそうなんですけど、こっちから見ると、高齢者の居場所だし、こっちから見ると保護者の居場所になってるっていうように、ひとつの場所でもいろんな人の居場所だなあというふうにとらえることもできます。もちろん、こどもだけの利用者のところもあるかもしれませんが。ただそうしたときにも運営者は、いろんな地域の人で支えてたら、運営者側の居場所にもなると思うので、多分見方を変えると、この場って、誰の居場所なのかってのは、正直わからなくなるっていうのが、居場所の境界線の曖昧さ、だというふうに思ってますし、良さだと思ってます。

私、最後にですね、事例としてご紹介したいのは、今ですね、愛知県高浜市さんと一緒に居場所づくりを地域全体で進めています。本日も高浜市さんがここにいらっしゃるといふことで、このご紹介を私から

するよりも、ぜひ高浜市さん、見つけたらですね、捕まえていろいろ聞いていただきたいんですけど、ここはかねてから高齢者の居場所づくりをずっとやってきました。その高齢者の居場所づくりをずっと続けてきたこの地域資源が、高浜市の貴重な地域資源だと。だから、この地域資源をうまく活用して、こどもも含めたみんなの居場所にしていきたいと。これまで高齢者に限定してたものをみんなの居場所、まぜこぜの居場所にしたいんだということで始めました。これをですね、やっていく中で、なるほどな、こういう進め方もあるんだ、ということが私の中で、ひとつの事例としてですね、学ばせていただいたところをご紹介したいと思います。

先ほどからお話してるのは、ずっと居場所というのは、居場所づくりをしようとする人の存在がいて、居場所になる例を、今想像してると思うんです。ただ、まちなかには、何故かあのベンチが溜まってる、おばあちゃんたちがとか、なぜかそこに人が集まるという場所ってあると思うんですね。それが現在ではなかなか、多くなっていない。減っていくっていう傾向にあると思っていて、それをじゃあどうやったら増えていくのか、ということをし掛けている例だなと思ってます。

例えばですね、ショッピングセンターに、今までは空いてるスペースをただ野放しにして座ってる人がいるっていう状態のところに、フリーWi-Fiを置いてみました。そしたら、中高生が集まるようになりました。でもそこには誰もいません。でも中高生が集まるという場を許容する、用意するっていうことは、そうしたショッピングモールでもできるようなことです。

あとは地域にある生活雑貨のお店です。この生活雑貨のお店の一角のスペースを、皆さん誰でもどうぞという形で休憩スペースにしたりします。

あとはハウスメーカーのオフィスで、使っていない商談スペースを開放する。そんな例もあります。

つまりですね、居場所づくりというのは確かにこども食堂のような居場所づくりをする人で成り立つ側面もあるんですけど、このように、地域の一角をちょっと開放するとちょっとした工夫によって、人の居場所になるような場は、増えていくんだろう

なと思ってます。かつ、それはこどもの居場所でもあり、もしかしたら、地域の住民のどなたかの居場所でもある。そんな場がたくさん増えていくことが、こどものみならず、地域全体が健やかに続けていけるような、先ほどご紹介した、まさに地域づくりにつながるんじゃないかなと思ってます。いわゆる、私どもが非常に感じてるのは、居場所づくりというものは、その子の居場所をつくることもそうなんですけど、その先に広がる地域づくりにもつながるものなんだな、ということの思いながら、今日ご紹介させていただきました。ご清聴いただきありがとうございます。

▼秋田：加賀様どうもありがとうございます。「どこかに」と、同時に、「あちこち」に、そして居場所を作るというだけじゃなくて、居場所になっているところから、またさらに地域づくりへ、というお話もいただきました。ありがとうございます。それでは続きまして、早坂様、お願いをいたします。



▼早坂：それではよろしく願いいたします。私からは少し観点を変えまして、いま地域共生社会がこの時代に持っている意義、つまり2025年、令和7年、ここにこの地域共生が持つ意味っていう観点で、現在と未来と、また未来に向けた願いのお話を、コミュニティ・スクールと越境っていう概念を使って皆さんと共有させていただきたいと思います。

加賀さんが先ほど、こども食堂の認知度について、「皆さんどれぐらいだと思いますか」とって質問されたので、ちょっと、私も同じような形で聞いてみようかなと思うんですけど。

コミュニティ・スクール、聞いたことあるぞっていう方はどれぐらいいらっしゃいますでしょうか？

(挙手) あ！やっぱりね！このサミットならではの挙手の率かなと思います。

これ全国的に見るとですね、圧倒的に認知度低くて、イメージがわからないっていう人でも4割ぐらい、日本国民の中にいるくらいなんです。なおこの越境という言葉については、企業関係者、特に、人事（ヒューマンリソース）の人たちはよく使う言葉なんですけれど、なかなか、もしかしたら皆さんの分野では目にしたり耳にしたりしないかもしれないと思って、今日あえて取り上げさせていただきたいというふうに思います。

さあ、それではですね、私、教育を専門にする研究者の一人なんですけれど、普段やっていることが、まさにこのスライド1枚で説明できるかな、というふうに思っています。世の中にある多様性、バラバラを、バラバラなだけで、うまいこと、緩やかにひとつにまとめていったときに、そこに、新しいわくわくが生まれていく。ここをねらいにした研究や実践を繰り返している人間だったりします。

この多様性、まさに、この地域共生社会の実現を考える上で、外すことができない概念のひとつかなと思うんですけれど、なかなか取扱注意な概念のひとつかなと思っています。というのも、バラバラが非常にバラバラすぎると、世の中に、ある種のカオスのような状態が生まれますし、逆にみんなでひとつになろうって凝縮性を高めていくと、ガチガチな、開放的じゃない、自由の少ない社会になってしまいますよね。つまり、この間をどの塩梅でバランス取っていくかっていうところが、地域ごとに納得のいく答えを、私たち作っていかなきゃいけない時代なんだろうなと思います。この新しいわくわくを各地域で、小学校区ぐらいの規模がいいかなと思ってるんですけれど、その規模で地域の人たちが、自分たちなりの納得のいく答えとして、自分たちのわくわくを生み出すような地域がこれからたくさん出ていけば、これからの人口減少社会、あまり悲観することはないんじゃないかな、そんなふうにも思っていたりする人間です。

さあ、残りですね12分ぐらいで話をまとめていくんですけれども、大きく3つのパートに分けてお話をしていきます。今回のメインテーマの現在、そして未来、そして願いです。

皆さんがやられている地域共生に向けた、或いは共生社会の実現に向けた様々な活動は、おそらくこの「橋をかける」という行為に非常に近いことをされているんだろうなと思うんですね。橋っていうのは、それがないと渡れないところにかかりますよね、川とか谷とかにかけるわけですけど、まさに私たちは今どこにいるのか、ここをしっかりと認識した上で、さあこっからどっちの方向に橋をかけていくのかを、みんなで話し合ってみんなでわくわくしながら、あっちが面白そうとかこっちの方が楽しそうだって言いながらですね、橋をかけていくわけですよ。なので、未来を作っていくときに、今どこにいるのかを知らなければ橋はかけられない、っていうすごく大事なポイントがあるんだと思うんです。その上で、じゃあどの未来を考えていくか、あっちなのか、こっちなのか、そっちなのか、どっちに向けて橋をかけていくのかっていう次の選択があって、その時の橋をかけるときの原動力は、私は「わくわく」と「願い」だと思っています。

どんな未来をこの地域に望むのか、それがすべての原動力なんじゃないかとそんなふうに考えたときに、まず、現在私たちはどこにいるのかっていうのをちょっと大きな視点で把握してみたいと思います。それが、今スライドに出ている第四次産業革命という言葉ですね。私たち人類はですね、ホモサピエンス、何回かねアフリカから出て、ヨーロッパの方だったりアジアの方だったり移動を試みて、途中でやめて戻ってきたりしながらですね、最終的に出たのが6万年ぐらい前だって言われています。ここを人類の出発点だとしたときに、1回目の産業革命がやってきたのってイギリスだと250年ぐらい前ですね。日本だと明治維新の頃なので160年ぐらい前です。つまり1回目の産業革命を迎えるのに私たち人類は6万年ぐらいかかっているんですよ。第二次産業革命で重化学工業が生まれたのが今から80年前、つまり日本でいうと1回目の産業革命が160年前、2回目の産業革命が80年前、つまり、第1から第2にステップアップするのに80年しかかかっていません。1回目の産業革命に6万年もかかったのにですよ。これが第三次産業革命でパソコン・インターネットが出てくるのが1980年代から90年代、今の非常に大きなプラットフォーマーたちアップルとかグーグルと

かが生まれた年代ですけれども、この年代の第三次産業革命に行くのに、約 50 年とかです。つまり、産業革命が起きるスパンがとてつもなく短くなっているということ、ここで私たちは 1 回押さえておかなきゃいけないんだと思うんですね。

いま私たちはこの 4 番目、皆さんご存じの人工知能の指数関数的な技術革新が止まらない、そんな時代を生きています。次の画像は、私がまさに人工知能にプロンプト、指示を出して書かせた絵なんですけれど、左側は人工知能と人間が非常に仲良くやっている絵でございます。手を携えて、お互いがね、お互いの発展のために支え合っている、そんな未来です。右側ちょっと見えにくいかもしれないんですが、人工知能によって人間が首を絞められている未来です。実はこれ SF ではなく、今、かなり起こる可能性の高い未来として、今、予想されているものの 2 つなんです。ここから先、人工知能は私たちに与える福音となるのか、それとも私たち人類を支配する側に回っていくのか。

今あらゆる分野で人間よりも人工知能の方がうまくやると分野が増えてきましたね。将棋なんかでいうと 2010 年ぐらいにもうプロ棋士勝てなくなりましたし、囲碁で言うと 2017 年には勝てなくなりました。2020 年を超えると芸術分野でも人間を凌駕するようになっていきます。コロラド州で行われる世界的な絵画コンクールで、優勝するのが AI が書いた絵、なんていうのは当たり前のようにニュースで飛び込んでくるようになりましたね。今、ちょっとした指示を出すだけで、歌詞をつけて曲をつけてですね、幾つものパターンの曲をたった 5 分で何曲も出してくれる AI もあります。もう私たちが一生かけてですね、絵を学んだり音楽を作ったり、そういったことがあつという間に、今の技術革新によって乗り越えられてしまう時代が来たときに、さあ人間だからこそできることって何なのか、そこを考えないといけない時代が来ています。

私のメインフィールドである学校教育は、授業の学習指導において、AI 教材がどんどん入ってきています。今、人間が教えていない学習塾、かなりの割合で全国にあります。こどもたちは、目の前にあるパソコンの中にある AI との対話で五教科を学んでいくんです。すごい効率よく学習をしていきます、こ

どもたちは。いわゆる認知能力、ペーパーテストではかれる学力に限定すれば、人間よりも、もしかしたら今、AI の先生の方が上手に教える、そう言い切ってしまう時代がいつか来てもいいかもしれません。さあ、AI が芸術だけでなく授業だけでなくあらゆる分野で人間を凌駕していく時期を、「技術的特異点」、「シンギュラリティ」というふうに呼ぶんですけど、これって 2045 年ぐらいに来ると今から 10 年ぐらい前に予測されてたんですよ。つまりあと 20 年。でもこの未来予測が最近更新されたのをご存じでしょうか。2025 年の 4 月に出た論文の中に明記されていて、チャット GPT のエンジニアが 5 人集まって書いた論文があるんですね。皆さん、チャット GPT 使われてますかね。何か検索するときにとても便利ですよ。あのエンジニアたちがこのままこの技術が進んでいったときに何が起こるかっていう未来予測を、科学的なエビデンスに基づいて書いた論文があるんですよ。その論文によると、シンギュラリティはかなり早まって 2027 年に来ると予想されています。今年の 2025 年あと 1 ヶ月ぐらいで年が変わることを考えると我々残された時間はあと 1 年、この 1 年の間に様々な領域で AI は人間を凌駕していくことがおそらく確実に起きます、ってなったときに、さあ私達って、人としてこれからどう生きていったらいいのか、この危機感と同時にわくわくを私たちは持たないといけない。まず、ここが出発点だと私は思っています。ちなみに、AI2027 という論文なので、読んだことないぞっていう方は是非是非ご覧いただければと思います。

さあ、いま、そんな場所に私たちがいるのだとしてですね、未来に橋をかけていくって考えたときに、どんな時代からどんな時代が変わっていくって考えることができるかっていうと、ひとつは、もういま答えが溢れている時代だってことです。何か問題や疑問があれば、AI に投げると答えはいかようにでもかなり専門的なエビデンスに基づいた確かな答えが返ってくるようになってしまっています。私も大学教員としてあと定年まで 15 年ぐらいあるんですけど、AI と競いながら、自分の専門性を常に AI より上に持っていけないと仕事がなくなると思っています。大学自体がつぶれなくても、学生がこっちを見なくなりますから、先生に聞くより AI に聞いた方が

確かだなんて言われてしまえば、いよいよ我々教員もこの先なかなか厳しい時代だなというところです。答えが溢れる時代に、私たちが率先して舵を切っていかなきゃいけない方向性のひとつとして、納得のいく答えをその地域ごとに作っていくっていう、これがひとつ求められる方向性かな、なんていうふうに思います。

まさに、今回の座長秋田先生が全力で関わっていただいている次期学習指導要領、ここから先のね、2030年からの教育課程の基準になる学習指導要領ですけれども、その中でも語られているようにですね、多様な子どもたちをみんなで育てていくんだってことが「論点整理」の中で示されています。今日は、これにコミュニティ・スクールという概念で残り時間5分ぐらいで迫っていきたくと思っています。

コミュニティ・スクールって仕組みについて、初めて聞いたよって方は、ぜひ、皆さん各自でね、お調べいただければと思うんですが、一言で言えば、地域にいる人たちを学校運営に参画してもらう、要は一緒に学校を作っていく、一緒に学校を動かしていくという仕組みです。都道府県ごとに導入率かなり差もあります。実は、お手元の資料は、資料出した時点のもので、1年古い資料になってます。資料提出時は最新だったんですけど、この最新版が、今こちらのスクリーンに出ているものになっています。

どういう割合になってるかっていうと、全国で見ると公立の学校、つまり幼稚園から小中高そして特別支援学校までを含めた公立の学校でいうと64.9%が、いま、地域とともに学校運営していくコミュニティ・スクールに変わっています。義務教育の段階で見ると、これは7割を超えてくるんですね。こんなふうにコミュニティ・スクールが進展しているのですが、なかなか認知度も上がらず、どこまでお手伝いしたらいいのか、その当事者性みたいなのは本当に地域ごとに或いは学校区ごとに様々ですね。

今日は時間の関係があるので、個別性の高い事例の1個1個をご紹介することはできないんですけど、私がコミュニティ・スクールの本質だと思っているものを、またAIの画像生成の力を借りてですね、ちょっと説明させてください。

私が普段生活している上田市でよく見られる事例が、このおばあちゃんの膝の上に乗っている小学生の女の子っていうね、この絵なんですね。小学校って1時間目、2時間目終わると、どこの地域も大体、業間休み15分とかあって、子どもたちはブアーと校庭に出ていって、ドッジボールやったりかけっこしたりしますね。でも特性の強いお子さんは1、2時間目でかなりへとへとになって、集団授業の中でもう息継ぎができなくてですね、どっかで充電しないといけないんですよ。今子どもが減って空き教室が増えている学校は、地域の方が自由にそこにいられるコミュニティールーム、或いはボランティアルームを設置している学校が増えていますね。

そこにいる地域の方のお膝に乗る女の子がいるんですね。私、何してんだろうなと思って、「何してんの？」って女の子に聞いたら「充電」って言ってたんです。かわいいなと思って、終わった後子どもが帰った後、おばあちゃんに、「充電されちゃったから、おばあちゃん元気なくなっちゃいましたか？」て聞いたら「私も充電した」というんですよ。すごい心温まるエピソードだなと思って。

そこには体温の交換がまさにあるんですね。人と人との触れ合いがあって、おばあちゃんが高齢だからお孫さんも大きくなって長野から離れて最近お話しする機会もなくて、でも学校に来ると子どもがいるんだっていうんですよ。膝に乗ってくれるんだって、温かいんだって言うんですね、手を握ってくれるって言うんです。これが生きがいなんだって言って、おばあちゃんそうやって子どもたちがまた3時間目に戻ると、そのコミュニティールーム、ボランティアルームにいるおじいちゃん、おばあちゃんと話し合いや雑談が始まるんですよ。

お茶飲みながら、長野の人野沢菜漬けるんですけど、「野沢菜漬けてなかったなあと思って、お父さんも亡くなっちゃったから自分だけで野沢菜漬けるのちょっとなかなかね重い腰が上がるいな」なんて言ったおばあちゃんが、そこで会うおじいちゃんおばあちゃん、新しくできたお友達のために、野沢菜をまた漬けるようになって、生活が戻ってくるんですよ、高齢者の皆さんに。

実はこのコミュニティ・スクールがある地域は、災害に強いこともよく知られています。何かあったときに、お互いに名前と顔がわかっている、あの人足悪かったよね、みたいなことをみんなが把握しているんですね、それで、また避難所に行った後もです。お互い顔知っているの、知らない中で生活するよりも、圧倒的に過ごしやすいなんてことがあったりします。コミュニティ・スクールを通じて、いま、外国にルーツを持つお子さんやご家族も増えていて、そういった多様性を包摂する場所として、コミュニティ・スクールが注目されています。

冒頭で申し上げたように、多様性ってのは扱いが難しいです。我々が市民として成熟しなければいけないってことはもちろんのこと、多様性が高まりすぎると、なかなかコントロールがきかないところもあって、でも、子どもをまさにまんなかに置くんですね不思議なことが起きますね。我々大人同士ではぶつかり合う関係かもしれないところを、まんなかに子どもがいることによって、コミュニケーションが少しやわらかくなることがあります。お互いを見るんじゃないんですよ、人を見るんじゃないで、子どものために何ができるかっていう議論ができるようになります、私たち人間は強い。それがコミュニティ・スクールの実践でわかっています。

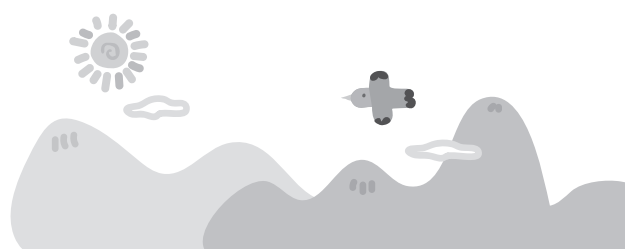
最後です。人間だからできることの発想の転換がいま必要です。人工知能の技術的な革新がどんどん進んでいった中、これまで人間がやっていた仕事の大部分がAIによって自動化、そしてより効率化を図られた形で、私達から仕事がどんどんAIの方に流れていきます。そうやっていったときに、人間しかできないことって何か。これって、私、人間って迷うじゃないですか。感情もあるじゃないですか。面倒なことは嫌だし、わがままなんですよね。この人間の本当にどうしようもないところ、これって、でも迷うから気づくことがあるし、感情があるからその人なりの感性が生まれて、面倒だからやり切った後に笑顔が生まれるし、わがままって磨けば信念になるんですよ。こんなふうに人間臭さみたいなところを、コミュニティ・スクールっていうこどもまんなかの制度にあらゆる大人を集結させることによって、様々な越境が生まれるってのが今日の落ちでございます。

越境っていうのは我々が日常的に見るセーフティゾーン、つまり家庭とか或いは職場とか、もうどう振舞ったらいいかわかるよっていう状況から一歩踏み出して、ちょっと頑張らないといけない領域に足を踏み出すことなんです。この越境ができると、私たちは少し変わることができます。これを居場所と呼んでもいいのかもしれないですね。居場所って言えば、高齢者の方にお話しさせていただく機会がよくあるんですけど、「もうこの年になると新しい場所きついよ早坂さん」ってよく言われるんですよ。だけどね、一歩踏み出してみる。そうすると、そこにはこどもがいたり、或いは新しいお友達がいたり、どこに踏み出していいかわかんなかったら学校においでって、いま高齢者の方いっぱい声をかけています。そこには本当にたくさんの方のわくわくが待っていますっていうふうにお話をさせていただくんですね。

ということで、私の落ちでございしますが、バラバラだけど緩やかにひとつになっていくときの仕組みとして、コミュニティ・スクールをこれからも推進していきたいなと思いますし、また会場にいる推進にご一緒されてるお仲間の皆さんもですね、ますます頑張ってくださいたらなと思います。私から以上でございます。

▼秋田：早坂様ありがとうございます。生成AIが本当に凌駕する時代だからこそ、改めてコミュニティ・スクールで、人と人の温もりやコミュニケーションのあるそういう場に学校がなっていくということが、また、子どもだけではなくて地域の人の居場所になっていくんじゃないかというお話をいただきました。ありがとうございます。

それでは加賀市で実際に取り組んでおられる中村様の方から、今度お話しをいただきたいと思います。お願いいたします。





▼中村：改めましてカタリバの中村と申します。早坂先生のお話、すごい面白いなと思いながら聞いてたんですけど、いかんせん声が良すぎるなと思って。それはもう吸い込まれていくなつていうぐらいなんで、僕は、結構ダミ声で、ざらつきのある声で、石川弁バリバリで行こうかなと思ってます。

皆さん、発表が続いたと思うんで疲れてると思うんで、ちょっと伸びをさせていただきながら、リラックスしながらトイレに行くタイミングもここだと思います。この15分間で行ってもらえれば。ちなみに、「加賀市の方ってどれぐらいいますか」ほぼ、加賀市なんですね。おふた方が手を上げるやつやってたんで、僕もちょっとやってみたいなと思って真似してしまいました。

2年前にかな、石川県に来ました。加賀市で今仕事してますが、それまでは、直近は島根県の津和野町っていうところで、人口6,000人ぐらいの町で10年住んでました。そこでは、高校魅力化っていうのを15年前ぐらいからやっていて、高校生が町に飛び出して町から学ぶことってできるんじゃないのっていうことで、町の人とか町の課題とかにどんどんつながって行って、そういうことを10年ほどやっていて、高校生だけじゃなくて小中学生もそれってできるんじゃないのって言って、それってもっと手前の就学前もできるんじゃないのっていうところから、「ゼロ歳児からの人づくり」っていう事業になって行って、でも赤ちゃんを育てるのは親なんじゃないのっていうことになり、親の教育も必要なんじゃないのって言ってさかのぼってくと、この町の親になる人たちは、実はうちの町の高校生だったということで、もうゼロ歳の子を育てるとしたら、この高校生からそれを意識して育てたらいいんじゃないかっていう、

グル〜っと人のサイクルを意識しながら、小さな町で「ゼロ歳児からの人づくり」っていう事業をやってきました。

それで、今日は加賀市の話として、3つの話をしたいと思っています。1つ目は、加賀市の子どもたちの居場所の本音ということで、実際に加賀市の子どもたちはどんなことを思ってるのかなっていうのは、先ほど国のデータも紹介されたんですが、それを比較しながら子どもたちの様子を見ていきたいなと思います。

2つ目は、いくつかやってる実践はあるんですが、その中でもちょっと面白いなと思ったものを、加賀市で今取り組んでる居場所的な実践を紹介しようと思っています。

最後3つ目は不登校。私が今関わっている不登校っていう切り口から見た居場所っていうことはどういうことなのか、っていうことを考えていきたいなと思っています。

まずは加賀市の子どもたちの居場所の本音ということで、こちらは国のアンケートになりますが、ちょっと見にくいので、つまり「居場所が欲しい」と答えた子のうち、実際に「居場所がないよ」って、「1つもないよ」っていうように感じてる子は、全体の17%ぐらいいたと。ざっくり6人に1人ぐらい。居場所が欲しいけど、「今ないよ」っていう子がいたと。これ右側のグラフはまだ国の話ですね。全体の小学校年代で「居場所がないよ」って答えた小学生年代が20%ぐらい、中学生年代は26%、高校生年代は26%ということで、何が言いたいかというと、年代が上がってくごとに居場所がないなって感じている割合が多くなる、ということだけまず押さえていただいた上で、じゃあ、実際、加賀市はどうかということで、加賀市の居場所に関するアンケートを見ていきたいなと思っています。

「居場所が欲しいか」っていう問いに対して、「はい」と答えたこどものうち、「居場所がないよ」と答えているこども、小学生は17%で全体の8%ぐらいでした。90%ぐらいは、「居場所があるな」と感じている。もしくは「いらない」、「そもそも大丈夫」と。加賀市の中学生に聞いたところ、「居場所が欲しいんだけどない」って答えてるこどもの割合は16%。これも先ほど言った国の割合と比較的近いんですが、

6人に1人ぐらい。大事なのは、やはり小学生に比べて中学生の方が「居場所が欲しいけどない」って言っている実態があると。小学生は結構、後から言うんですけど、子ども会が頑張っていたり親子劇場さんが頑張っていたりということで、私自身も基本的には小学校に対して結構リーチしてるんじゃないかなとは思っておりまして、じゃあその中学生を少し深堀っていきたいと思います。

中学生に、「居場所がある」と答えた子のうち、「そこはどこですか」と聞いたところ、1番多かったのは、おじいちゃん家とか友達の家、2番目は部活動や習い事、習い事とか塾とかっていうと居場所とかになりやすいですね。また、黄色の53人なんですけど、これが、「オンライン、SNSを居場所だと感じる」というふうを選択していると。あと、3番目に多いのは青ですね、「ショッピングセンターやファーストフードなどのお店」やはりこういうところも居場所と感じている。これ実際に加賀市の話です。加賀市の中学生は、もう居場所としてショッピングセンターやファーストフードを感じてるし、オンラインやSNSっていうところを居場所と感じていると。回答した居場所はどのような場所ですかというところに関しては、いつでも行きたいときに行けるとこであり、ひとりで過ごせたり、何もせずのんびりできるっていうようなことを、居場所の要素としてなんですかね。居場所はこういうところだということです。

もう2つ質問紹介します。居場所、自分がここによってファーストフードにチェックしてる子もいたり、SNSにチェックしてる子もいるかもしれないんですけど、「その場所に行くようになって変わったことありますか」という質問に関しては、「楽しいと感じる時間が増えた」とか、「気持ちが落ち込みにくくなった」ということが一番多いと、もう1つ、その下の質問が面白いなと思ってるんですが、「あなたが居場所でやってみたいことやもっとこうだったらいいなと思うこと」、これ結構、ちょっとポイントかな。「どんなふうな居場所だったらいいですか」というふうにならな中学生に聞いたときは、「自分の好きなこと、興味のあることをしたい」という声が一番多いんです。そりゃそうですね、本読んだりとか漫画ゲームしたいとか。ただ、やっぱり、この辺

がリアルだなあとということで、2番目とか3番目に多いのは、「あまり大人の方から構わないで欲しい」シビアですね、「話したいときに自分の話を聞いて欲しい」とか、「悩み事を話したいときに味方になって欲しい」というような、結構、絶妙な思春期の声が上がっていると。だからといって、僕が言いたいのは、声をかけないほうがいいとか、ほっとけってことを言いたいんじゃないじゃなくて、やはり、この中学生の居場所って、こんだけ絶妙な塩梅が必要、バランスが必要で、関わりすぎてもいけないしでも話を聞いて欲しいときに聞いてあげるってというのは、この絶妙なバランスを意識して僕たちは中学生や高校生の居場所づくりを考えていかなきゃいけないというふうに思っています。

改めて、先ほどもずっと出てきていますが、大人が考える居場所づくりと、子どもが感じる居場所ってというのは、やはりギャップがあると。加賀市でいくと、意外と橋の下とか河原とかに子どもが集まっていたり、やはりWi-Fiがあるところとかコンビニとかマクドナルドっていうところで、やはり居場所づくりと子どもたちが先ほど答えたアンケートのギャップを埋めていかなければいけないというふうに思ってます。

また、いくつかターゲットによって居場所づくりのやり方は変わってくるなど。全員に開かれた居場所なのか、ある程度絞った子たち、ハイリスクな子たちに向けた居場所なのかという視点であったり、開室時間も放課後、土日にある居場所もあれば、平日の日中にある居場所もあるかもしれません。特に不登校の子ってというのは、平日の日中に向けての居場所が必要になるかなと。そして対象年齢によりアクセスの範囲ってのも変わってくるので、小学生だとやはり学区に1つ、校区に1つ、そういった場所が必要だと思いますし、高校生ぐらいだったら活動範囲が広いので、駅にたむろしてる子ってのも多いと思う。たむろというか学習ですね、学びをします。多分。っていうところを意識しながら私たちの居場所づくりを考えていかなければならないと思っています。

いくつか紹介したいと思います。「おんせん図書館みかん」さんです。ご存じの方も多いと思うんですが、やはりこの面白さは、本棚のオーナーになる

っていうところで大人の参画の余地もあるのと同時に、やはり図書館だっていうことの入りやすさ。何もしなくてもいい。本を読んでもいい。こういった違う目的で運営されているんですかね。裏目的は居場所なのかもしれないけど、表面は図書館だっていうところの入りやすさが、特に注目すべきところだなというふうに思ってます。

そしてこちらですね、駄菓子屋という体なんだけど居場所感を感じる、松が丘地区にある「駄菓子屋さくら」さん。ここも、駄菓子が子どもたちを集める誘引力、吸引力になってると思いますし、ここにはドネーションボックスということで、大人が500円寄付したりしたものは、子どもたちの100円チケットに還元されるというような取り組みを実施されています。

そして、山中温泉のところにある古着屋、新しくできた古着屋「COSMO」さん。古着を店舗の全部に置きたいんだけど、あえて半分は居場所にしたい、子どもたちが来て欲しいということでソファを置いてるですね。服を、本当は店舗中に並べたいんだけど、あえてソファとか、集まれる工夫、取り組みを実施しているってところが面白いなと思いました。中高生も大歓迎ということで。

そして「たかまるひろば」さんは、自宅の1室を子どもたちに開放してるということで、自宅でもできるんだと。1室余ってる部屋とか蔵があれば、もしかしたら子どもたちが集まれる場所になれるかもしれない。

そして、先ほどコミュニティ・スクールの話、早坂先生からもありましたが、これ中学校でやってる事例なんですけど、コミュニティ・スクールが主催した居場所づくりということで「校内カフェ」というのを実施している。地域の人とのつながりや接点を目的にしつつ、普段の先生と違うような会話、関係性を作れるというところも好評があります。やはり、この校内カフェにすることによる意味っていうのは、誰もがアクセスできるっていうところ、学校内に居場所を作る取り組みっていうことでは比較的やりやすい取り組みだだと思いますし、よく行く学校の中でカフェっていう形式で子どもたちと会話するっていうのは、とても楽しいいい時間になるかなと思います。

これまでの居場所は、ある程度民間主体でやっている居場所だったかなと思います。もちろん、場所がないような取り組みもありますし、結果として居場所になっている古着屋さんとか、もともと目的としてやってるおんせん図書館みかんとかっていう違いはあるかもしれませんが、で、この後の不登校の話はどちらかというと行政寄りの取り組みかなということで、ちょっと分けてあえて書いてあります。

最後に、3つ目の話題として、不登校の取り組みから考える場所ということで、ちょっと駆け足になるかもしれませんが、ご紹介したいと思います。

ターゲットによって変わる居場所づくりということだったんですが、不登校ってのは、誰でも来やすい場所でもないし、特定のニーズを持つ子に絞り過ぎてるわけでもないの、どちらかというところの間ぐらい。ターゲットを絞り、ハイリスクの子に近いようなんだけど、一応この間ぐらいかなというふうに思っています。

加賀市では、教育ビジョンの中で、不登校対策を2つ目の柱として掲げてやってきてます。学びを変えるという1つ目の柱が、最終的には学校より居心地のいい場所にして、誰1人取り残さなくなるんじゃないかということで、1つ目の学びの改革も一緒に、同時にやっています。具体的に、不登校支援プランというものを作成して、学校の中にも居場所、学び場を作り、学校外にも居場所、学び場を作るという取り組みを進めています。その中でも特徴的なものとして、スクールサポートルーム SSR というところがあります。学校の中に居場所を作ってます。空き教室や放送室などの空間を使って、学校には登校できるが、教室には居づらい子どもたちが過ごせる場所、少し休んでエネルギーを貯めながら、部分的に教室に戻るような場所として運営しています。これ今、3年かけて全校に配置してます。ただ、使わない、使っていないとか、利用者や希望がない学校もあるので、まだ部屋として開設してないところもあるんですが、一応全校に配置してます。

そして2つ目には児童センターとも連携しながら、児童センターの方だったら通えるよっていう子に関しては、児童センターさん、今日もいらしているんですが、協力してもらいながら、子どもたちの居場所づくりを行っている。

そして、オンラインでも居場所を作っています。メタバース上でも居場所の運営を行っていて、部屋から出れない子、家から出れない子に対して何らかのコミュニケーションをとって接点をもってつながろう、そして、安心・安全の場をつくりながら、エネルギーを回復できるような支援をしています。また、こどもたち1人1台端末があるので、そこからチャットで相談できる。ラインで相談するような形の取り組みも実施していて、大体毎月150件ぐらいこどもたちから相談があります。軽い相談から重い問題の相談までいろいろあるんですが、こういった取り組みも今、加賀市では実施しているということです。

ちょっと時間が今ぎりぎりなんで、簡単に最後のスライドです。居場所につながる工夫としては、やはりこの不登校の文脈でいくと、特に周知の課題。こどもたち全員がそれを知ってるのか、支援のメニューを知ってるのか、保護者も含めて。そして、知ったけど、そこに1度も行ったことがないという接続の課題があると思っていて、最初の1回はそこにちょっとした後押しであったり、コーディネートするっていう背中の中の少しの後押しがあるっていうことが重要だなと思ってます。

今日は、加賀市の方も多いと思うのでこどもや保護者だけではなく、こういった事例を学校の先生、地域住民など、こどもを取り巻く関係者が、まずはその居場所のやってる内容であったり支援の存在を知る中で、それをこどもたちに伝えていくっていうところから始められるんじゃないかなと思い、最後、紹介させていただきました。私の話はこれで終わります。ご清聴ありがとうございました。

▼秋田：中村様ありがとうございます。加賀市を羨ましいと思います。いろいろなところに公民館の方がこどもたちの居場所を担っている場を提供されていたり、一方で、行政的にはまだこれから周知や接続の課題が必要なんじゃないのというようなお話も出していただきまして、本当に、それぞれの地域、ブーメランのように返ってくるなど私自身は感じさせていただいたところでもあります。

どちらかという、居場所づくりの話っていうのは、さっきも中村さんのお話でもありました、乳幼児から小学生ぐらいまでは、まだ学童とか、こども

の居場所が手厚いんだけど、中・高・大学生はどうなの？って私は考えて、知らないわっていうか、大学って大きすぎてなかなか居場所はサークルだったりになるのかななんて思いながら、一番今、問われている、その若者としての思春期に入った中高生をどうしていくのかっていうところが大事なかななんていうことも、伺っていたところです。

せっかく、この実践をされてきている4名の皆様方ですね、それぞれの立場から、まずはお話していただいたんですけど、ちょっと聞いてみたいよとか、実はここはもっと言いたいところがあったんだとか、私も、早坂さんが言ってたけど、今の時代は「こどものため」じゃなくて、「こどもとともに」の時代なんだよ、とかってちょっと思ったりしたんですけども。どうでしょう。加賀さんから聞いてもいいですか。お願いします。



▼加賀：ありがとうございます。私は、早坂さんには是非聞いてみたいなと思っていることが1個あるのと、ひとつ付け加えるところですね、結構、私はずっとこどもの居場所づくりを中心にやってきました。それ現場でもですし、こどもの居場所づくりに関する指針みたいなものをこども家庭庁でも関わってきたので、結構こども中心にやっています。今、いろんな自治体さんで、この居場所づくりの政策のご支援をしていると、最初こどもの居場所づくりで入ろうとするんですけど、なんかあんまり感触よくないんですね。なんでかっていうと、そもそもうちの自治体、こども減ってるし、こどもという旗だけではちょっともうやりきれない。なので、居場所づくりっていうのは誰でも居場所が必要だし、居場所づくりはみんなのものなので、みんなの居場所づくり。また、世代交流のような文脈にうまくこどもを接続

する計画、政策であればいけるかもしれない。みたいなことで、こども支援課みたいなところから最初アプローチするんですけど、そうじゃなく、地域福祉課とか市民協働課とか、そっち側から一緒になって居場所づくりを推進する、みたいなことがあります。これは逆に、居場所づくりっていろんな課に横断して、こどもだけじゃなくて地域福祉、高齢福祉、障害福祉とか、いろんなところに居場所って言葉が使われていて、この課でもやっているからみんなでもやりましょうっていうことが一番やりにくいんですけど、逆にいろんなところでやってんなら、ここでヒットしたらこっちから行こうっていうように、違う手だてが考えられるってというのは、ひとつの居場所づくりの何か進め方のポイントだなあというふうに思います。それぞれの地域の中から、どの居場所づくりというか、どの対象から全体を広げていくのかみたいな発想ですよ。

早坂さんに聞きたいなと思ったのは、今のお話、やっぱり地域の居場所づくりの中で学校外のところを今イメージしてたんですけど、やっぱり学校が居場所になるっていうことは、こどもにとってとっても大事だなと、かつ、学校がその場所って言っても、多分学校をもうちょっと分解できる、例えばクラスとか保健室とか校庭とかコミュニティルームとかのように、何かこう学校というひとつのくりの中にもあちこちに何か居場所があると、クラスが嫌だったらさっきみたいに充電しに行くみたいなこととかがある。ただ、その学校の中でもあちこちにあるっていうことが大事そうだなと思ったときに、何かやっぱりこの学校をいろんなタイプの場所を用意していくっていう学校と、それがコミュニティ・スクールのヒントだと思うんですけど、できる学校と、やっぱりできない学校ってこら辺の差が、もちろん校長先生みたいなところもあると思うんですけど、学校の中のあちこちに居場所をつくる学校とそうじゃない学校って、なんかどこら辺に違いが出てくるのか、みたいなことを聞いてみたいなと思ったんですけど、どうですか。

▼早坂：ありがとうございます。私の発表時間だけでは十分に触れられなかったところ、こんな形で発言する機会をいただいて、本当にありがとうございます。

いまおっしゃった通り、学校の中に複数の居場所を作っていくっていうコミュニティ・スクールのあり方は、いま各地域でそれぞれ進められているところなんですね。そんな中で、やっぱり地域差、学校差ってというのは当然あって、学校の中に居場所を多くつくる要因として何が考えることができるのかっていうことで、2つに限定してお話をさせていただきます。

いまは結構チャンスなんです。というのは各自自治体で学校の再編が行われています。その小規模校を統合してですね、義務教育学校9年間のカリキュラムで組み直して、新たな学校を作っていくとする地域が多いです。私がいる上田市もまさにそうですね。これね、とてつもないチャンスですよ。もう、場合によっては校舎から立て直せる場合もあるので、そうなったら、今こどもの多様性、まさに神経多様性に応じて、いろんなお子さんがいるっていう前提の上で校舎をどんなふうで作っていくか、こどものwell-beingを高めていくための校舎について文科省もまとめているんです。

こんな居場所があったらいいよねって。誰かとながらための居場所を我々はイメージしやすいですけど、こどもってやっぱりひとりでいたい居場所も必要なんです。誰ともつながらなくていい場所、要はバラバラでいていい場所みたいな。これってやっぱり新しく学校を作っていくときのひとつのポイントになっていくだろうなってことで、そういういい時期にあるということです。

あとは、既存の学校でどうしていったらいいのかっていうところについては、町や村の機能を学校を中心に、いま、組み直している自治体さんも多いですね。いろんなところに行政機能が分散していることがいい場合もあるんですけど、場合によっては学校の周りに、例えば京都市なんてそうなんですけど、学校の中に郵便局があったりして、要は、地域の人が普通に学校の敷地の中に入って、いろんな人が関わられるような仕組みを作っていくっていい

るところがあります。なので、大きな流れで学校の再編や地域の再編というのがひとついえるかなと。

あとは、いま加賀さんがご指摘された通り、これ校長先生のリーダーシップがとてつもなく大事です。校長が腹くくれるかどうかなんですよ。校長が腹くくれるかどうかは、皆さんにかかっているんですよ。校長ひとりで判断したときに、責任取らなきゃいけないのは校長ですから、「校長先生やろうよ」って「この学校にたくさんの居場所をつくろうよ」「私たち応援するよ」って市民の皆さんがバックアップすると校長は強いです。っていうところがとりあえず言えることかなというふうに思います。ありがとうございます。

▼秋田：ありがとうございます。皆さんが校長の応援団になれるといいのかもしれないと。でもなかなか難しいことも私はよくわかっています。はい、そのあたりですけれども、実際に加賀市に関わっている中村さんいかがでしょうか。別に加賀市の校長がどうこうっていう話は全くなく、自由に他でもやってこられたこと話していただければ。

▼中村：加賀市の校長先生素晴らしいです。皆さんで校長先生をサポートして、実際に動かしていきましよう。できると思います。なぜかという、ちょっと長くなるんですけど、やはり学びを変えるっていうことをここまで実施してきたのは、校長先生のリーダーシップだと思うので、それができた校長先生であればもう一歩先の取り組み、コミュニティ・スクールと一緒に地域住民とやるってことは、私はできるというふうに思っています。

質問もいいですか。加賀さんに質問です。こども食堂の団体、全国的な団体ということで、こども食堂についてお聞きしたいなと思ってます。

加賀市でも、10年前ぐらいから7団体ぐらいが実施されたんですが、やはりコロナとかもあって半分ぐらいに減って、結構持続とかすることがすごく難しいのかなという印象もあります。ただ、全国的に広がっている取り組みなので、このこども食堂が持つ良さであったり、可能性や、立ち上げやすかったりするのかなと思っているので、こども食堂の良さ、魅力と、そしてそれが持続するためのポイントみたいな、うまく行くためのポイントとかあれば教えてもらいたいなと思いました。

▼加賀：ありがとうございます。ちなみにこの会場で、今、こども食堂を運営しているっていう方っていらっしゃいますか？（挙手）いますね。もしね、今、手を挙げた方についていうことでもあるんですけど、私の視点で、やっぱり、さっきの「どなたでもどうぞ」というふうになっている実態からして、地域食堂とかみんなの食堂というふうに変えている自治体さんや地域もあります。ただ、こども食堂という名前にし続けているっていうこともやっぱりポイントがあって、それは、やっぱり「こども」ということをつけるというか、その言葉に秘める、何とかしなきゃとか、何とかしたい、支えたいっていうふうに思わせる求心力があると思うんですね。これ、貧困問題もずーっと日本であったんですけども、ただ、こどもの貧困って言ってから貧困対策ってぐぐっと前に進んだ印象があります。私も足立区でやっていた事業、その事業に基づいてたんですけど、やはり「こどもの」というふうにつく言葉の持つ力っていうのが、何とかしようということで人が集まりやすい。なので、こども食堂がみんなの食堂であって、みんなでそこでご飯を食べることの意義とか、そういうのももちろんあるんですけど、「こどもの」というふうにしたときに、地域の人とその言葉に集まってくる。この指とまれになりやすいなというふうに思っているのが、やっぱりこども食堂の持つ可能性であり、これだけ地域の人が進めていこうとしているということだと思っています。こども食堂、本当にですね、何の法律も何の制度にもなっていないんです。それが良さでもあるんですけども、でもそれが、今、1万800ヶ所に増えている。そしてそれは中学校の数を超えている。中学校区に1個あるという計算です。どんどん小学校も減ってるし中学校も減ってるけど、何故かコロナ禍でもどんどんどんどんこども食堂増え続けているっていうのは、やっぱり、私はやりたい、何とかしたい、これだったら始められるかもっていうふうに思える可能性のある器だったというか、そういうものがこども食堂なんだろうなと思っています。

ただ同時にですね、そう始めるものの、やっぱり続けるのがとっても難しかったりする。なぜなら市民活動で、最初は持ち出しでやってたんだけど、でも、これ毎回やってたらどんどん大変だぞと。時間

も出し、能力も出し、お金も出していうことでやっぱり続かないってことがあるので、そこには大きく2つ、ひとつは運営者さんとお話をしている、無理をするってことが一番続かなくなるポイントでした。行政にもいろんなことお願いされるみたいなことがあるんですけど、それを引き受け過ぎちゃうと、本来やりたかったことがやれなくなるというか、これをやらなきゃいけないみたいになってくると、やっぱり気持ち的に続かないっていうのが出てくるので、自分がやれる範囲で続けるっていうことが1つと、あとはやっぱり地域のこども食堂の運営者さんを、周りで支える方が必要で、企業の方が余った食材を寄付するとか、自分のとれた野菜を提供するとか、または運営のお手伝い、運営者のメインはできないけど年間で2回ぐらいは手伝いに行けるよとか、自分のやれる範囲の支え合いでこども食堂をみんなで作っていくと、結構続いていくっていうことがあるかなとは思ってます。

▼中村：加賀市では、こども未来基金ということで、立ち上げと継続でちょっと違うんですけど、年間20万円ぐらいの補助があるので、そこはある程度クリアできていると考えると、やはり伴走する仕組みとかアドバイスする仕組みっていうところは、もうちょっとあるといいんじゃないかっていうことです。

▼加賀：そうですね。おっしゃる通り結構この20万円あるっていうのは、僕も知らなかったんですけど、今おっしゃっていただいている通り、金銭的な補助があるっていうところと、ない自治体も地域もあるんで、我々、助成金みたいなのを作ってお渡ししたりすることもあるんですけど、加賀市がそれがバックアップできているっていうのは非常に大きいリソースだとは思いますが。

ただ、やっぱり、それでもなかなか始められないってことがあるのは、もしかしたら、始めたら誰かに何か言われるかもしれないとか、誰が始めるのかわからないとか、始めてみたい人とのマッチングするような人がいないのかもしれないみたいなことがあります、我々が調べているデータだと、石川県で、昨年度ですよ、これ公表できてるデータじゃないですけど、加賀市が一番こども食堂の充足率が低いんです。そうなんですよ。これ逆にポテンシャルがあって、この充足率って言ったら、1つの小

学校区に1個こども食堂があると、我々が勝手に充足しているというふうに言ってるだけなんですけど、それでいろいろ全国見ているんです。石川県の中で、加賀市の数が他の市町村よりも少ないってのが出ていて、でもこれは、これから増えていく可能性があるというふうに思っています。ここは多分コーディネーターとかの存在が重要なのかなというふうに思います。

▼秋田：ありがとうございます。いよいよ盛り上がってきたときに、そろそろ閉めねばならないという苦しいところではありますけれども、是非ですね、今日の議論を伺って、私は加賀さんに伺ってみたいのはこども食堂、割と中高生の居場所とはまた違う部分もあるかなっていうふうに思って、そのつながりをどう考えてらっしゃるのか。嶋崎さんには、是非、縦割り行政じゃなくて、こどもじゃなくて全体なんですって言われたときに、こども家庭庁どうしますって。私もこども家庭庁の審議会の会長をしている立場もあって、どうしようと思いつながら、それぞれ今日の締めとして、今の私の振りからは自由になって、1、2分で結構でございますけれどもお話をいただきたいと思います。急に振ったので、多分、嶋崎さんが一番苦しいと思うので、最初に中村さんから順に指名をいただいでいいでしょうか。お願いします。

▼中村：私は加賀市にいますので、当事者の1人だと思っています。この町で、何ができるかっていうことを一緒にこれからも考えていけたらなと思っています。やはりやっていると思うのは、大人もこどもも一人ひとりが違っていているっていうことも前提に、こどもたちの違いを認めていくっていう、受けとめるってことがまずひとつかなと。

日中にこどもたちが歩いてても、それはそれであるんじゃないかとか、やはり学校に行ってなきゃダメ、おかしいんじゃないかっていうようなことではなくて、それを受けとめる。そしてそこに関心を持って、こういう情報もあるんじゃないかっていうことを知らせていくっていうことから、まずは一緒にやっていたらなと思っています。引き続きよろしくをお願いします。

▼秋田：それでは次に、早坂さんお願いします。

▼早坂：スクリーンちょっと切り換えていただいているんですか。1枚だけ写真を投影させていただきたいと思います。皆様のお手元にはない個人情報含まれるお写真なんですけれども、2つ、この時間を使って皆さんと最後に共有をさせていただきたいと思います。

(右側に大人の男性、左側に小学校中学校くらいの男の子が肩をよせあって座っている背中を写した画像)

1つは、コミュニティ・スクールを通じて私が実現したい絵がまさにこれなんです。なんの絵か。普通に考えて、親子なのかなって見えるかもしれないんですけど、これはコミュニティ・スクールを一つの組織の核として、地域学校協働活動、要は地域の人が学校の皆さんと一緒に展開した活動の中で知り合った赤の他人なんです。左側のこどもが右の大人にまさに寄り添うように近くにいられる。この景色を私はまずは上田市、そして長野県にどこでも見られる当たり前のように、地域の中で、或いは地域とともにこどもが育っていく環境を作りたいというふうに思っています。

2つ目は、まさにその活動。ここ加賀市、或いはご自身のお住まいの自治体でいま難しさを抱えなら進められている皆さんへ。私たちは仲間ですので、ぜひ一緒に頑張っていきましょう。難しいこと多いですが、先ほど秋田先生もおっしゃられたように、こどものためなだけけど、大人がやっぱりわくわくしないと。自分たちが楽しくわくわくしながら、その背中をこどもに見せることで大人になりたいと思う。そういう地域を作っていけたら、コミュニティ・スクール、多分100点なんだろうなというふうに思っています。皆さんのますますの活動のご発展をお祈り申し上げて終わっていきたくと思います。ありがとうございました。

▼秋田：ありがとうございます。ほっこりする写真もありがとうございます。それでは加賀さんお願いします。

▼加賀：本日ありがとうございました。私はですね、その居場所というものが、居場所づくりというふうに気合いを入れてやっていくもののみならず、人が集まるということが地域の中で点在していく、それをやっぱり地域として許容していくってことがとっても大事なんだろうなというふうに思います。

何かこう最終的には、居場所ってというのが、この地域全体であるというか、この地域自体が自分の居場所だなどというふうに思っていることは、もしかしたら、外に出てたとしても戻ってくるかもしれないし、この地域に何か返そうとか、この地域で過ごしているということにつながるんじゃないかなと思うんです。そうした施設とか場みたいなのもあると思うんですけど、地域の中の許容されるような居場所みたいなものが、どんどん増えてほしいなというふうに思っています。

そこで、先ほど秋田先生からの振りに少し通ずるところで、許容されにくいのが、中・高生だと思ってるんですね。小学生が公園でたむろしてると、なんかほほえましいんですけど、中学生がなんかたむろしてた、何か悪いことしてるなみたいな。ちょっとコンビニにたむろしてたら、集まりを分散させられちゃうというか、許容されない世代ってこの中・高生だと思ってます。やっぱりこれをどうやったら地域で許容できるのか、ちょっとはめ外していたりとか、うるさかったりとか、おいおいと思うこともあると思います。それは確かに、ちょっとな…っていうふうになると思うんですけど、ただ中学生が集まっているだけだったらそれも微笑ましいし、高校生だって行く場所がなくてそこのかもしれない。そうした場所を、やっぱり思春期の世代にも許容するっていうことは、とても地域としては何かこう地域の受容力を高めることになるんじゃないかなというふうに思っているところです。

私自身は、思春期という言葉結構テーマに置いていて、特にこのこどもの居場所の中でもこの思春期世代には居場所がやっぱり少ないし、持ちにくい。で、持ちにくいからいろんな問題につながってる。トヨタの問題とか、自殺の問題とか、いろんなものに発生してると思うんで、この思春期の居場所を広げようという全国キャラバンをですね、いきなり宣伝になっちゃったんですけど、12月にですね、いろんな団体の人たちと一緒にキャラバンをやるということで、まず今年は東京と関西の2回やるんですけど、私だけじゃなくいろんな人がそこに協力や、何か賛同してくれた方と一緒に思春期の居場所を広げようというような活動をやると思っています。ですので地域の中で、思春期世代が居場所

が持てるように許容することを、皆さんと一緒に進められたらなというふうに思っております。本日はありがとうございました。

▼秋田：それでは嶋崎さん、お願いします。

▼嶋崎：ありがとうございます。本当に勉強になりました。

2つお話をさせていただきたいなと思っております。居場所づくりというところで、今日、様々な事例お聞かせいただいたんですけども、その地域によって様々な資源のあり方とか、土地柄とか、交通機関のあり方とか、環境によってこの居場所づくりの考え方が変わってくると思っているので、そういった中で、まず皆様には、こどもの居場所って何？というところから、まず地域でとか会議とか、あとお近くの方同士で考えてみる。そこで、我々の中ではこういうところがもしかすると足りてないかもしれないとか、そういうことが結局わくわくというか地域にわくわくをもたらすようなことにつながっていくんじゃないかな、ヒントが得られるんじゃないかなというふうに思っております。

今日、カタリバさんとかむすびえさんとかありましたけど、地域によってこういう団体さんとか民間の資源が少ない地域もございます。なかなか東京のそういう事例は参考にならないよ、みたいなこともお聞きする事がありますので、我々としては様々な人口規模の事例であるとか、取り組みというものを、今後とも皆様にお伝えできるような情報を集めて、公開できるような形を作っていきたいというふうに思っております。

2点目、最後になりますけれども、やはり孤独・孤立という言葉が最近よく聞かれます。やっぱり、その切れ目という言葉がありますが、切れ目というものが年齢の切れ目で起きるものなのか、はたまた制度の切れ目ということで、こどもたちの居場所とか、せっかくそこが居場所になっていたのにそこから離れないといけないというようなことも起きておられます。そういったことを、こども家庭庁としても、制度の切れ目というものはまず無くしていくということが大事になってくるんじゃないかと思っております。

最近、小1の壁とか学校との連携という課題が問われるようなことが出てきています。そういった中で、我々も文科省様と連携しながらこの課題に取り組んでいるということで、省庁を超えてやっていくということで今やっておりますので、こういったことを取り組みながら、横串を刺していくとよく言いますけれども、そういった意味で、皆様、地域づくり、または市、県、民間が一体になって、この居場所づくりに取り組んでいくように、我々としてもリーダーシップといいますか、皆様のご意見を頂戴しながらこども政策づくりやっていきたいと思っております。本日はありがとうございました。

▼秋田：ありがとうございます。すでに予定の時間を2分超えているのですが、秋田が1分だけお話をさせていただきたいと思っております。

本当に、今日は魅力的なお話をそれぞれの立場の方から、いろんな場があるということをお話をさせていただくことができました。そして、やはり一番若者とと言われるところが、これから問うていく必要があるということをおわかったところですが、こども家庭庁ではやっぱり一人ひとりすべてのこどもの声を聞いていくというところはですね、思春期になっているこどもたちは声をなかなか発しなく、大人に向けては発しなくなりやすい。ですけれども、その場に集まってくればこどもの方が多ければ、大人にも聞こえてくる声がある。そういう居場所を私たちがどう、それぞれの立場から考えていけるかという問題を、今日は提起していただいたのかなと私自身は、伺っていて思ったところがあります。

今日のテーマはですね、本当は「こどもたちの笑顔がいきかう地域づくり」この笑顔がいきかうということも、お互い知り合だから笑顔になって挨拶をしたり、つながっていけるそういう関係がですね、さっき早坂先生が後姿でほっこりする写真を見せていただきましたが、ああいうつながりを各地域が作ることは、それぞれご参加の方が皆さん自分でできることだと思います。そういうはじめの一歩から、進めていきたいなと思っております。

本当に、貴重な機会をいただきましたことを感謝申し上げますし、素敵な人選によって、いろんな視点からお話を聞けることができましたので、ご担当の子育て支援課にも御礼を申し上げますと思います。

そして、お帰りのときにこの部屋を出ましたら、すぐそこに「こどものこえ展」のポスターが貼ってございます。是非、これは乳幼児の加賀市のお子さんたちが描かれたポスターであります。

地域がつながっていく元は、乳幼児期にこどもと保護者や、いろんな地域の人がつながっていくことが、さらに小学校・中・高とつながるためにも重要なところでございます。是非、一步外でちょっと足をとめて見ていただけたらと思います。

それでは、今日は3分時間が延びてしまって申し訳ありません。改めて、ご発表いただいた皆様に、拍手をもって終わりにさせていただきたいと思えます。ありがとうございました。

